

第一編 政治・行政

第一章 明治の大町	三
第一節 維新前後	一
一 清水又居と明治の黎明	三
二 松本藩の改革	四
1 議事上局・下局の開設	四
2 議事所の新設	五
第二節 行政の移り変わり	七
一 維新の変革と筑摩県の誕生	七
1 版籍奉還	八
2 廃藩置県	七
3 筑摩県の誕生	一〇
二 筑摩県から長野県へ	一一
1 筑摩県下問会議	一一
2 長野県の誕生	一三
三 戸籍区から大区小区制へ	一三
1 戸籍区	一元
第三節 地方三新法下の大町	三
一 地方三新法	三
1 郡区町村編成法	三
2 府県会規則	三
3 地方税規則	三
二 戸長公選と町村会の発足	三四
三 北安曇郡の誕生	五六
1 北安曇郡と郡役所	五六
2 窪田畔夫郡長	六六
四 長野県会の発足	元
1 最初の県会議員選挙	元
第四節 大区小区制	四
一 新しい村の成立	七
1 常盤村の場合	七
2 区扱所仮議定書と扱所の位置	八
3 初期の財政—常盤村	一〇
4 大町村と高根新田村との合併	一一
第五節 大区小区制	一七
一 大区小区制	一七
1 常盤村	一七
2 区扱所仮議定書と扱所の位置	一八
3 初期の財政—常盤村	一九
4 大町村と高根新田村との合併	二〇

五 府県会規則による県会の状況	六 連合戸長役場の発足	七 明治一〇年代の財政	四 各村の財政	二 町村制施行直前の状況
1 自由民権運動と大町	1 戸長役場と戸長官選	1 明治一六年一大町	1 社平常盤村	1 大町会の混乱
2 戸長・助役の選出	2 連合戸長役場時代	2 戸長の大町会	2 平常盤村	2 当初の大町会
3 六月の大町会	3 大町警察署長の見解	3 町村制施行当初における大町の行・財政	3 各村の変遷	3 初の大町会
4 大町警察署長の見解	4 (5) 町村制施行当初における大町の行・財政	4 (1) 明治二四年	4 (2) 明治三六年	4 (2) 初の大町会
5 若干の考察	5 北安曇郡役所の焼失と再建	5 (1) 明治二四年	5 (2) 明治三六年	5 (3) 初の大町会
三 大町における一、二級議員派間の対立・政争	三 北安曇郡の歳入・歳出	三 各村の変遷	三 各村の変遷	三 各村の変遷
四 各村の変遷	四 各村の変遷	四 各村の変遷	四 各村の変遷	四 各村の変遷
五 各村の変遷	五 各村の変遷	五 各村の変遷	五 各村の変遷	五 各村の変遷
六 各村の変遷	六 各村の変遷	六 各村の変遷	六 各村の変遷	六 各村の変遷
七 各村の変遷	七 各村の変遷	七 各村の変遷	七 各村の変遷	七 各村の変遷

八 明治三〇年代の財政——大町	一三	2 衣・食・住	一一三
九 伊藤清次郎町長と大町中学校誘致	一六	九 そ の 他	一六
一〇 遊廓設置をめぐって	一六		
第五節 変わる民衆の生活	充	第二章 大正の大町	一六
一 新しい戸籍（壬申戸籍）	充	第一節 大正デモクラシーと大町	一六
二 太陽暦の採用	吉	一 大正デモクラシーと大町の動き	一六
三 年中行事と祝祭日	三	二 米騒動と大町	一六
四 新聞の購読と文盲率	歯	1 米騒動とその原因	一六
1 新聞の発行と購読	歯	2 長野県の米騒動	一六
2 常盤村の識字率	歯	3 謹啓 大町長殿	一六
五 ガス灯と公衆便所	毛	4 当局の対策	一九
六 庶民の文芸や評論	毛	5 再び、謹啓 大町長殿	一九
1 有楽新誌	毛	6 節米のすすめと結果	一九
2 北安盟親誌・美鷗盟親誌	毛	(1) 節米・混食のすすめ	一九
七 村祭と奉納芝居	毛	(2) 節米運動の結果	一九
8 社村と米騒動	毛	7 平林秀吾の米騒動観	一九
三 普通選挙運動	一〇	8 社村と米騒動	一九
1 普選運動	一〇	2 普選運	一〇
2 普選法施行後第一回衆議院議員選挙	一〇	普通選挙法施行後第一回衆議院議員選挙	一〇
八 冠婚葬祭と衣食住	八	八 冠婚葬祭	八
2 平村の場合	八	2 平村の場合	八
八 冠婚葬祭	一三	八 冠婚葬祭	一三

(1) 啓蒙活動	一 活動写真	三
(2) 大町の普選第一回衆議院議員選挙	二 演劇	三
四 部落解放運動	三 鎮守の祭	三
1 概観	四年中行事	三
2 水平社運動と信濃同仁会・融和運動	五 その他	三
3 戰前における到達点	六	三
第二節 地方自治の変遷	七	三
一 町村政治の改良	八	三
二 民力涵養運動	九	三
三 郡制下における事業	十	三
1 教育	十一	三
2 土木	十二	三
3 勘業	十三	三
4 衛生	十四	三
5 その他	十五	三
四 大正時代の財政—大町	十六	三
1 大正五年	十七	三
2 大正三年	十八	三
五 郡制の廃止	十九	三
第三節 庶民の娛樂	二十	三

第三章 昭和前期の大町

第一節 恐慌下の町村政—平村を中心として

第一節 恐慌下の町村政—平村を中心として	三七
一 概観	三八
二 救農土木事業	三九
三 村税の滞納と役場吏員などの寄付	三九
四 生活改善・消費節約	三九
五 平小学校の移転増築をめぐって	三九
六 平尋常高等小学校	三九
七 大暴風による雨天体操場の倒壊	三九
八 昭和四年の平村会議員選挙	三九

4 村会議員當選者無効の申し立て	一毛	二 部落会・町内会の組織と統制	一毫
第三節 恐慌下における民衆の動き	一完	三 生活改善	一毫
一 須沼労働組合	一毫	四 諸団体の活動	一毫
二 野口労働組合	一毫	1 在郷軍人会平村分会	一毫
第四節 公益質屋の設置と利用	一毫	2 大日本國防婦人会大町分会	一毫
一 大町における公益質屋の設置	一毫	3 大町翼賛壯年団	一毫
二 公益質屋の利用率	一毫	五 翼賛選挙	一毫
第五節 平村における青年団の活動	一毫	1 大政翼賛会の成立	一毫
一 青年団の活躍	一毫	2 翼賛選挙	一毫
二 活動の急進化と電灯料値下げ運動	一毫	(1) 常盤村	一毫
三 青年団と平村政	一毫	(2) 平村	一毫
四 平女子青年団	一毫	六 戰争の長期化と増加する町村葬	一毫
第六節 選挙肅正問題	一毫	七 その他の事項	一毫
一 選挙肅正	一毫	1 興亞奉公日	一毫
二 長野県の肅正選挙	一毫	2 大詔奉戴日	一毫
三 肅正運動の実際	一毫	3 酒なし日	一毫
第七節 戰時体制の強化	一毫	4 紀元二千六百年奉祝式	一毫
一 国民精神総動員運動	一毫	第八節 大町における朝鮮人の記録	一毫
二 高瀬川発電所建設に働く人たち	一毫	Aさんの場合	一毫

三	生活苦にあえぐ人たち	五三
四	長畠発電所工事に働いた人たち	五三
五	昭和电工で働いた人たち	五三
六	その戦後	五四

第四章 町村政の民主化

第一節 敗戦	一七
第二節 インフレ下の財政—社村毛	一七
第三節 復員軍人・海外引揚者の動向	一八
第四節 日本国憲法の制定と法律・制度の改革	一八
一 日本国憲法	一八
二 婦人参政権	一八
三 その他の他	一八
第五節 行政組織と友好都市	一九
一 地方事務所	一九
二 大町役場と大町市役所	一九
三 姉妹都市と友好提携都市	一九

第五章 大町市の誕生	六一
------------	----

第一節 町村合併促進法と大町	六一
第二節 合併した町村の沿革	六一

一大平村	九一
二常盤村	九一
三社村	九一

第三節 市制合併への歩み	九一
--------------	----

一 大町連合青年団の合併運動	九一
二 大町議会が市制合併を決議	九一
三 住民投票の成功と市制発足	九一

第四節 合併議案の議決と各町村の概況	九一
--------------------	----

第五節 合併条件の概要	九一
-------------	----

第六節 名称および事務所の位置	二〇四
第七節 一体性確保のため実施された主な事業	二〇四

第八節 町村制以降の町村首長	二六
第九節 歴代市長と市議会議長	二九
第一〇節 計画行政の展開と法制事業 の推進	三一
一 振興計画基本構想の策定	三一
二 松本・諏訪地区新産業都市建設計画	三三
三 大北地域広域市町村圏事務組合	三三
四 地域経済活性化対策の推進	三四
五 同和行政	三四
第六章 行政と住民組織	三六
第一節 概 説	三六
第二節 行政と住民組織の変遷	三八
第三節 自治会の誕生	三九
第四節 大町の町名	三九
一 最初の町名と小路名	三九
二 町名の移り変わり	三九

第二編 産 業

第一章 農 林 業	三
第一節 明治初年の大町の農業	三
一 米中心の單作地帯	三
二 農 產 物	三
三 農業經營	三
第二節 常盤村の農業	三七
第一節 明治前期の大町の農業	一〇
一 農業の概観	一〇
二 耕物生産	一二
1 稲 作	一二
2 米の生産における収支	一二

3 畑 作	1 食用農作物
4 畑作における収穫量の変遷	2 果 実
5 大麦栽培における二、三の特徴	四 隆盛期の養蚕業
6 社村におけるたばこ栽培	第五節 明治期における畜産・養鶏
三 明治二〇年代の農民階層	一 牛馬飼育
1 経営規模	二 養鶏・養豚
2 農民階層の変化	第六節 大正期の農業
3 農家經營	一 大町の産業構成
四 明治前期の養蚕業	二 養蚕・米を中心とした農業
第三節 明治後期の大町の農業	1 最盛期の養蚕業
一 新しい時代への幕明け	2 天蚕・柞蚕
二 谷物生産	3 米穀生産
1 稲 作	三 畑 作
2 稲作技術の改良	四 大正期の耕地整理
(1) 馬 耕	五 大正期の農民・地主
(2) 苗代の改良—短冊形苗代・共同苗代—	六 大町における小作慣行
(3) その他の改良及び指達と結果	七 大正期の畜産業
(4) 病虫害・風水害への対応	八 明治・大正期の林産業
3 畑 作	
三 食用農作物・園芸作物	

九 明治・大正期の農会	三四	4 平村の物産	三一
第七節 昭和期の農業		第二節 明治初年の大町の商工業と勧業政策	
一日中戦争前の農業の特色	三七	製糸業	三三
経済更生計画にみられる常盤村の農業	三七	1 大町地方の製糸業の初め	三三
2 自作農創設維持事業の概要	三三	2 生糸の品質向上対策	三三
事業実施申請の背景	三三	3 松本生糸改会社の誕生	三三
(2) 昭和七・八年の自作農創設の概要	三六	4 生糸改所の設置	三三
二 戰後の農業と農地改革	三七	5 長野県製糸場と大町工女	三三
1 終戦直後の農業	三七	二 諸物産の生産と経済活動の変化	三三
2 開拓事業の開始	三七	1 水餅	三三
3 常盤村における農地改革	三三	2 木工品	三三
第一章 発展する商工業		第三章 明治初年の大町の産業と経済	
第一節 明治初年の大町の産業と経済		第一節 明治初年の大町の産業と経済	
一 明治初年の産物と経済	三七	一 旧四カ村の物産	三七
二 旧四カ村の物産	三七	1 大町村の物産	三七
1 社村の物産	三七	2 味噌	三七
2 常盤村の物産	三七	3 醤油	三七
3 常盤村の物産	三七	4 酒	三七
		(1) 酒株制度	三七
		(2) 酒株制度の廃止	三七
		(3) 明治初年の清酒生産	三七
7 明治初年の商業	三三		

三 各種の勧業政策	三四	三 釀造業など	三三
1 物産溢製の禁令	三四	1 不況下の釀造業の好況	三三
2 博覽会開催による勧業	三四	2 その他の物産	三三
3 松本藩通用物産所	三四	3 鉱業	三三
4 開産社	三四	第五節 明治一〇年代の金融・商業及 び庶民のくらし	三三
(1) 開産社の設立	三四	1 産業の基礎作りと金融	三七
(2) 開産社の性格と資金計画	三四	2 開産社の苦境と解散	三七
(3) 開産社の営業活動	三四	3 勘業委員制度の発足	三七
第三節 明治初年の民衆のくらし	三二	4 大町銀行設立ならず	三七
1 民衆の経済生活	三一	5 無尽と質屋	三七
2 明治初年の物価	三一	第二節 明治一〇年代の経済状況	三三
第四節 明治一〇年代の経済状況	三三	1 松方デフレ政策の波紋	三五
1 松方デフレ政策の波紋	三五	2 商業と庶民のくらし	三五
2 明治一〇年代の製糸業	三五	3 大町の物資の流通	三五
3 製糸業の動き	三五	4 庶民のくらし	三五
二 座織製糸から器械製糸へ	三九	第六節 明治中期の製糸業	三三
3 ある製糸家の経営状況	三九	1 明治中期の生糸生産	三三
4 友誼社の設立	三九	2 蘭、生糸の輸出入状況	三三
5 得信社の設立と景況	三九	三 明治中期の製糸工場	三三
6 蚕糸業組合の結成	三九		

一 明治中後期の醸造業の変遷	一 中期の生糸生産（得信社を中心として）	二 製糸工場数の増加	三 製糸工場の経営状況	四 得信社の経営状況	五 器械製糸の発達	六 製糸業の発展	七 技術改良の努力	八 技術改良の成果	九 信光社の設立	十 第七節 明治後期の製糸業	十一 明治後期の生糸生産	十二 明治後期の製糸工場	十三 明治後期の製糸業經營	十四 明治後期の器械製糸	十五 器械製糸の発達	十六 揭返場の増加	十七 製糸工女たち	十八 製糸工女の勤務実態	十九 工女たちの出身	二十 製糸工女たちの努力と功績	二十一 生糸同業組合の設立	二十二 第八節 明治中後期の醸造業									
四九	四五	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一			
一 中後期の醸造業の経営	二 大町の醸造業	三 後期の醸造業	一 商況と商圏	(1) 醤油	(2) 清酒	二 政府の酒税増税路線	三 酒造組合の結成	一 その他の産業の動向	二 動向と勧業政策	三 特產物	四 織物	五 和紙類	六 その他	七 第九節 明治中後期のその他の産業																	
四九	四一	四一	四一	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三					

1 清 酒	三 商習慣の移り変わり	五七
2 味噌、醤油など		五九
二 その他の	第一六節 大正時代の金融	五九
1 和紙生産	一 大正時代の銀行	五九
2 凍豆腐、氷蕎麦、氷餅	二 庶民の金融(質屋)	五九
3 その他	三 産業組合	五九
第一四節 電力供給と電源開発	第一七節 大正時代の庶民のくらし	五五
一 安曇電気による電力供給	一 人々の職業の変化	五五
2 電気の普及	二 大正時代の経済生活	五九
二 電源開発の進展	一 金融恐慌と南信銀行の設立	五九
1 高瀬入の電源開発	二 大不況の進行	五九
2 常盤村での発電計画	第一九節 昭和電工と吳羽紡績の進出	五九
第一五節 大正時代の大町の商業	一 アルミニウムの生産始まる	五九
一 商業活動の活発化と商店街の形成	2 日本軽銀信州工場	五九
1 諸会社、商店の増加	1 アルミニウムの工業化と昭和電工大町工	五九
2 商店街の形成	場の設立	五六
3 各種市の開設	二 吳羽紡績大町工場の設立	五六
二 信濃鉄道の開通の影響		五六

第二〇節 戦時の大町の経済

五三

一 すすむ産業統制

五三

1 製糸・酒造・金融

五三

2 電力

五三

3 戦時の大町の産業と生活

五三

二 戦時の大町の工場

五六

第二一節 混乱から復興への大町の産業

五四

業と経済

五四

一 戦後の経済混乱

五四

二 復興期の産業と経済

五四

1 はじまつた経済復興

五四

2 昭和電工大町工場

五四

3 吳羽紡績大町工場

五四

三 復興から発展へ

五四

第二二節 戦後の電源開発の進展

五四

一 青木発電所の建設

五四

二 黒四発電所の建設

五四

1 大町ルート建設まで

五四

第三節 ダムの建設

五九

一 高瀬川の電源再開発

五九

1 計画のはじまり

五九

2 開発のはじまり

五九

3 着工から完成へ（七倉ダムと高瀬ダム）

五九

4 大町ダムの建設

五九

第二三節 高度成長期の大町の産業と経済

五九

業と経済

五九

一 高度成長期の大町の産業と経済

五九

二 産業誘致

五九

第二四節 現状及び課題

五九

一 昭和五〇年代の状況

五九

二 課題

五九

大題

五九

第二五節 大町の今とこれから

五九

第三編 交通・通信

第一章 道路と橋梁	一〇七
第一節 関門廃止令と筑摩県の道路行	一
政	二二
第二節 維新の交通安全規則	二〇
第三節 県内道路の格付け	二七
第四節 道路・橋梁の幅員	三二
第五節 道路世話掛の任命	三四
第六節 七道開さく(鑿)計画と大町一	三五
小谷線	三七
第七節 明治中期の大道路工事	四七
一大町—松本間の新道	四八
二 町川の埋め立てと街路の改修	四五
三 長野県の発足と大町—長野線	四五
四 旧常盤村の一〇里道改修	五七
第八節 町村制から旧道路法制定まで	六〇
一 仮定県道、郡道、郡費補助路線	六〇
二 郡道を一・二等に区分、補助	六二
三 旧道路法の制定	六三
四 道路の認定	六三
第九節 各町村の積極的な道路行政	六四
一 旧常盤・社両村の村道認定	六四
二 道路の維持と修繕	六五
三 道路の損傷に業者負担制	六七
四 県・郡道に電車軌道敷設	六八
第一〇節 高瀬川架橋の沿革	六九
一 徒渡りからみのた橋へ	七五
二 最初の高瀬定橋	七五
三 今に残る橋脚台「平岩」	七六

四	湯道の定橋	三
五	高瀬橋の変遷	三

第一二節	山と海をつなぐ道	三
一概説		三
二	越後への道	三
1	三坂峠の道	三
2	大納峠の道	三
3	菅沼・大峰峠の道	三
4	湯峠の道	三
5	乙見峠の道	三
三	上り下りの荷品の動き	三
四	越中への道(信越連帶新道)	三
1	常人不入の御縮山	三
2	両方の湯道を利用	三
3	黒部川を境に折半	三
4	一人、五銭の通行料	三
5	庄屋と武士の連合	三
6	二ヵ月の突貫工事	三
7	三年開通、廃棄	三
8	信越新道を踏破した英人E・M・サトウ	三

第二章	運輸の発展	一
-----	-------	---

第一節	宿駅「問屋・役人」の廃止と	一
伝馬所の設置		一
第二節	陸運会社と中牛馬会社の設立	一
第三節	大町における初期の運輸業	一
第四節	明治中期から後期までの運輸業	一

業

一 明治中期の運輸業

二 輸入と輸出の荷品の動き

三 人力車と乗合馬車

四 牛馬の陸運心得

五 荷車・駄牛馬・自動車の取締規則

第五節 発展する交通機関と施設

第六節 鉄道に圧倒された車馬運輸

第七節 小運輸会社の乱立と日本通運

第八節 バス・タクシー

第三章 鉄道と輸送	六五	一 人力車・馬車の終焉と乗合自動車	七三
二 大町のバスとタクシー	六〇	二 難題を背負つて開通	七四
三 大町ルートのバス運行	六二	三 各駅の乗客と貨物の状況	七五
第四章 河川と輸送	七八	一 難航の数々、災害と戦争	七三
第一節 信濃鉄道以前の鉄道計画	六五	二 難題を背負つて開通	七四
二 幻の大町—明科間の汽車	六六	三 各駅の乗客と貨物の状況	七五
第一節 信濃鉄道	六五	第四章 河川と輸送	七八
二 宿駅筋に沿つた計画	六七	第五章 郵便	七三
二 表と裏の日本に通じる殖産興業	六九	第一節 維新までの通信制度	七三
三 県・郡・町村の積極的な寄付	六九	第二節 国営郵便の草創期	七四
四 ダイヤ狂うローカル線	七三	一 飛脚と郵便取扱所	七五
第三節 大糸線全通までの歩み	七四	二 脚夫一人分の荷量と距離	七七
一 長野・新潟両県の宿願	七四	三 官への願書・伺書は半額	七八
二 大町中央駅の設置運動	七四	四 明治中期の郵便置局と路線	七九
三 嫌われた煤煙、電化の促進	七四	第三節 郵便事業の発展	七〇
四 全通への悲願、軍部とも提携	七四	一 為替の創業	七〇
		二 郵便貯金	七一
		三 小包郵便	七二
		四 振替	七三

五 簡易保険	七三	1 全国自動化への歩み	七三
六 速達	七三	2 局舎の新增設と無線回線	七三
七 年賀はがき	七三	3 無線・公衆電話	七三
四 郵便切手の変遷	七四	4 災害対策電話	七四
第五節 大町郵便局の沿革と業務概要	七五	第五節 有線放送電話施設	七五
第六章 電信・電話	七〇	一 町内放送施設	七〇
第一節 電信機の渡来	七〇	二 有線放送電話の誕生	七〇
第二節 大町の電信誘致運動	七一	三 施設の近代化と合併	七一
第三節 架線コースの誘致合戦と開局	七一	第六節 新聞・報道	七一
一 電信線架設費の献金	七一	一 新聞	七一
二 池田町村など三カ村は脱落	七一	二 ラジオ・テレビ	七一
三 電信の開通(明治二十五年三月一六日)	七一	三 行政広報	七一
四 電信発受の心得	七一	四 時報	七一
第四節 電話	七一	五 鳩通信	七一
一 電話の起源と大町の誘致運動	七一		
二 開通から今日まで	七一		

一 新聞	七一	1 全国自動化への歩み	七一
二 ラジオ・テレビ	七一	2 局舎の新增設と無線回線	七一
三 行政広報	七一	3 無線・公衆電話	七一
四 時報	七一	4 災害対策電話	七一
五 鳩通信	七一	第五節 有線放送電話施設	七一
一 町内放送施設	七〇	一 町内放送施設	七〇
二 有線放送電話の誕生	七〇	二 有線放送電話の誕生	七〇
三 施設の近代化と合併	七一	三 施設の近代化と合併	七一
第六節 新聞・報道	七一	第六節 新聞・報道	七一
一 新聞	七一	一 新聞	七一
二 ラジオ・テレビ	七一	二 ラジオ・テレビ	七一
三 行政広報	七一	三 行政広報	七一
四 時報	七一	四 時報	七一
五 鳩通信	七一	五 鳩通信	七一

第四編 軍事・司法

第一章 戦争と市民	一 戰争に対する大町の対応
第一節 徴兵制と市民	二 戰争に対する大町の対応
一 徵兵令の施行	三 観閲点呼
二 兵役免除と徵兵忌避	第四節 昭和期の戦争と市民
三 徵兵検査と入営	一 日中戦争と戦時体制の強化
第二節 日清・日露戦争と市民	1 日中戦争と大町
一 日清戦争	2 ある兵士の履歴書
二 日露戦争	二 太平洋戦争と市民
1 日露戦争への従軍	1 太平洋戦争
2 軍馬の生産と徴発	2 戰地からの便り（中国戦線）
3 子供の帰郷を待つ母親	3 ある医師の従軍（ニューギニア・ビルマ
4 日露戦争後の世相	戦線）
5 派手になつた入退営の歓送迎	4 太平洋戦争への従軍と犠牲
第三節 大正時代の戦争と市民	三 滿州移民と北安曇郷
一 第一次世界大戦への従軍	1 滿州移民の開始
(2) 満州信濃村の建設	2 北安曇郷の建設
(1) 武装移民の送出	

(3) 国・県あげの移民計画	八〇
(4) 西五道嶺北安曇郷建設	八三
(5) 金沙北安曇郷の建設	八五
(6) 入植の経過と開拓団の悲劇	八八
四 満蒙開拓青少年義勇軍	八八
1 義勇軍の創設	八三
2 義勇軍の募集	八三
3 義勇軍の出発	八三
4 募集難の義勇軍と学校	八三
5 義勇軍の歩み	八三
六 满州へ	八七
(1) 逃避行と抑留	八六
(2) 引き揚げ	八五
五 学童集団疎開と大町	八三
1 学童疎開の開始	八三
2 小学校の記念誌による学童疎開	八三
3 平村での学童疎開の受け入れ	八三
(1) 受け入れの概況	八三
(2) 平村での生活	八三
四 学童疎開の思い出	八三

第二章 大町裁判所の変遷

第一節 戦前の大町裁判所

第二節 戦後の大町裁判所

大町警察署の変遷

第一節 明治時代の警察	八九
一 筑摩県時代の警察	八九
2 明治初期の警察	八九
3 第二警察出張所	八九
二 大町警察署の変遷	八三
1 警察第六号出張所	八三
2 初の大町警察署	八三
3 松本警察署大町分署	八三
4 大町警察署	八三
5 受持区制度	八三
第二節 大正時代から昭和前期の警察	八三
4 学童疎開の思い出	八三

第五編 災害と消防

第一章 災害	八九
第一節 概説	八九
第二節 火災	八六
一 新町(大黒町)の大火	八六
二 八日町の火災	八六
三 郡役所の焼失	八九
四 三日町の大火	八九
五 借馬の大火	八九
第三節 震災・大町地震	全一
一 地震の規模と概要	全一
二 被害の概要	全三
第四節 水災	八六
一 概説	八六
二 明治の河川の氾濫	八九
1 明治一八年(七・一)水災	八九
2 明治四〇年(八・二五)水災	八九
3 鹿島川の氾濫	八九
4 昭和四年(八・一二)水災	八九
第五節 大風	八九
第六節 豪雪	八九
1 大正元(二年)	八九
2 昭和五(五六六年)	八九

一 自治体警察	八九
二 戦後の大町警察署	八九
第三節 戦後の警察	八九
第四節 庁舎の変遷	八九

第二章 消 防 ………………

第一節 江戸時代の消防……………	八七
第二節 私設消防組……………	八八

第六編 水道・衛生・福祉

第一章 上水道……………

第一節 飲用水の確保……………	九二
第二節 用水改良掛と水質保全……………	九三
第三節 大町上水道の布設……………	九五
第四節 上水道の普及と現況……………	九〇

第二章 保健・衛生……………

第一節 保健・衛生行政の組織化……………	九五
一 明治初期の概況……………	九五

第三節 公設消防組……………

第四節 警防団……………	九一
第五節 戦後の消防……………	九二
第六節 市制施行後の消防……………	九三

二 衛生意識の普及と衛生委員……………

三 衛生会の組織化……………	九七
四 清潔法の施行……………	九八
五 衛生組合の組織化……………	九九

第二節 伝染病対策と医療機関……………

一 コレラの流行……………	九三
二 公立松本病院大町分院の開設……………	九三
三 赤痢流行の影響……………	九五
四 隔離病舎……………	九六
五 腸チフスの流行……………	九七
六 大町町営病院の新設……………	九八

七 伝染病院の組合立化	九四
第三節 保健医療行政の転換	九三
一 大町保健所の設置	九三
二 新「保健所法」の制定	九四
三 市立大町総合病院の新築	九四
四 大町市の保健・衛生行政	九四
第四節 大町市の環境衛生	九五
一 ごみ処理	九五
二 し尿処理	九五
三 公営火葬場	九五
第五節 公害	九五
第三章 社会福祉と社会保障	九五
第一節 明治維新の社会保障	九五
一 社会保障の歩み	九五
二 懲教規則の制定	九六
三 開産社の役割	九六
第二節 明治・大正期の社会保障	九六
一 公的扶助の運用	九六
二 災害に対する扶助制度	九三
三 その他の福祉的制度	九三
第三節 恐慌から戦時下の社会保障	九三
一 救護法の制定	九三
二 青少年・母子家庭対策の充実	九三
三 方面委員の活動	九三
四 社会事業法とその他の援護	九三
第四節 戦後の社会保障	九三
一 終戦と旧生活保護法の成立	九三
二 社会福祉事業法	九三
三 福祉事務所の設置	九三
四 高度経済成長と福祉の充実	九三
第五節 社会保険	九三
一 国民健康保険以前	九三

第七編 教育・スポーツ

第一章 草創期の大町教育

第一節 学制までの教育

- 一 大町における私塾・寺子屋 卍二
- 二 郷学校入徳館の創立 卍三
- 三 中村孝三と入徳館 卍五

第二節 仁科学校時代

- 一 仁科学校の設立 卍六
- 二 平・社・常盤の学校設立 〇〇一
- 三 仁科学校への就学 〇〇三

第四節 勤労青少年教育

- 一 女子補習学校の設立 〇〇五
- 二 農工補習学校 〇〇七
- 三 貧しい子どもたちの教育 〇〇六

- 1 自由民権運動に参加したころ 一〇六

2 教育者としての活躍

第三節 尋常高等小学校時代

- 一 整備されていく学校 〇〇三
- 二 教育勅語下の教育 〇〇四
- 三 尋常高等小学校の独立 〇〇七
- 四 新教育課程と学校生活 〇〇九
- 五 学校における行事 〇〇三

2 制度の発足	九〇	二 国民年金	九五
3 終戦と国保の動向	九三	1 厚生年金保険の成立	九五
4 大町市国民健康保険の発足	九三	2 国民年金の成立	九五
5 その後の運営	九三		九五

第五節 中等学校教育

一 大町中学校の設立	〔〇三〕
1 松本中学校大町分校の建築	〔〇四〕
2 大町分校の開校	〔〇五〕
3 独立した大町中学校	〔〇五〕
4 大町中学校の教育	〔〇六〕
二 大町実科高等女学校の設立	〔〇四〕
1 高等女学校の創設	〔〇四〕
2 町立大町実科高等女学校	〔〇四〕
第三章 発展期の大町教育	〔〇四三〕
第一節 初等教育の発展	〔〇四三〕
一 教育の拡充	〔〇四四〕
1 大町実業補習学校の設置	〔〇四五〕
2 青年訓練所設立	〔〇四六〕
3 校舎の増築と施設の拡充	〔〇四七〕
二 大正期の授業	〔〇四九〕
三 小学校卒業後の状況	〔〇五〕
第二節 中等教育の拡充	〔〇五〕
一 大町中学校の発展	〔〇五〕
第四章 第二次世界大戦中の教育	〔〇五七〕
第一節 戦時体制下の大町教育	〔〇五六〕
一 経済不況下の教育	〔〇五六〕
二 青年学校教育	〔〇五六〕
三 不況下の校舎建築	〔〇五六〕
第二節 常盤尋常高等小学校の校舎移転新築	〔〇五六〕
1 平尋常高等小学校の校舎移転新築	〔〇五六〕
2 常盤尋常高等小学校的校舎移転新築	〔〇五六〕
第五章 現代の大町教育	〔〇五六〕
第一節 大町中学の教育精神	〔〇五八〕
2 大中卒業生の進路	〔〇五八〕
3 同窓会の創立	〔〇五九〕
第二節 大町高等女学校の発展	〔〇五九〕
1 郡立への移管	〔〇五九〕
2 県立大町高等女学校	〔〇六〇〕
3 新校舎の設立	〔〇六一〕
4 充実された大町高等女学校	〔〇六一〕
第三節 信濃木崎夏期大学	〔〇六三〕
第一節 教師の研修	〔〇六三〕
二 信濃木崎夏期大学の開校	〔〇六三〕

3 大町尋常高等小学校の移転新築 一〇六
4 社尋常高等小学校の建築 一〇九

1 公民館活動の基本方針と目標 一一〇
2 公民館の歴史 一一五

26

第二節 大町における幼稚教育 一〇八

一 幼児教育のはじまり

二 大町幼稚園の創設 一〇三

三 大町における保育園 一〇四

第三節 国民学校時代の教育 一〇五

一 戦時体制と結びついた教育 一〇七

二 太平洋戦争下の初等教育 一〇八

三 戦時下の中等学校教育 一〇九

第四章 戰後の大町教育 一〇六

第一節 新しい学校制度と教育 一〇九

一 新しい学校制度と大町 一〇七

二 新しくなった教育課程 一〇九

三 P.T.A. の発足 一一〇

四 教育委員会 一一三

五 公民館活動 一一四

第五章 スポーツ 一二六

第一節 概 説 一二八

第二節 渡邊敏と仁科学校の体育 一三三

第三節 明治期からのスポーツ 一三三

1 相 摆 一二三

2 柔 道 一二五

3 剣 道 一二六

4 野 球 一二七

5 軟式庭球 一二八

6 ス キ 一二九

7 ス ケ ト 一二四

8 水 泳 一二五

第四節 大正期からのスポーツ 一二七

1 弓 道 一二七

第一章 市民と神道・神社	二七
第一節 王政復古と神仏混淆の禁止	二七
一 神仏分離令下の大町	一七

第八編 宗 教

1 神仏分離令	二七
2 若一王子権現号の廃止	二七
(1) 権現号廃止	二七
(2) 観音堂と三重塔の廃止	二七
3 金峰山神宮寺の廃止と社僧の帰農	二七

2 陸上競技	一四八
3 バスケットボール	一五三
4 端艇	一四五
第五節 現代のスポーツ	
1 サッカー	一五五
2 射撃	一五五
3 バレーボール	一五五
4 卓球	一五五
5 ソフトボール	一五五
6 バドミントン	一五五
7 ゲートボール	一五六
8 小マラソン	一五六
9 空手	一五六
10 硬式庭球	一五六
第六節 登山と体操	
1 登山	一五六
2 体操ほか	一五六
第七節 現代の組織と施設	
1 大町市体育協会	一五六
2 体育指導委員	一五六
3 スポーツ指導員	一五六
4 スポーツ少年団	一五六
5 体育施設	一五六
6 公共施設開放	一五六

4 三宝荒神の宮守「宝藏院」の廃止と修験の

復飾・帰農

二五六

(1) 宝藏院九世

二五六

(2) 帰農した修験

二七〇

二 松本藩の強硬な神葬祭奨励策

二五六

1 藩知事の重大決意

二五六

2 管下の説得と「哀敬儀」の頒布

二五六

3 大町初の神葬祭と人々の戸惑い

二五六

(1) 初の神葬祭

二五六

(2) 根強い仏式の習慣

二五六

4 妥協のない仏教排除策

二五六

5 神葬祭改典強要政策の結末

二五六

三 伊勢御師の廃止と神宮大麻・暦

二五六

四 氏子札と壬申戸籍

二五六

1 氏子取調と氏子札の発行

二五六

2 壬申戸籍の編成

二五六

第二節 社格指定と社寺領上地・禄制

の実施

二五六

一 信農国安曇郡神社明細帳

二五六

二 社格の指定

二五六

1 村社と郷社

(1) 郷社定則

二五六

(2) 無格社指定

二五六

(3) その後の社格指定社

二五六

三 社寺領上地と禄制の実施

二五六

1 宮本神明宮の神事の縮小・廃止

二五六

(1) 社寺領上地令

二五六

(2) 神明宮領の処分

二五六

(3) 神事の縮小・廃止

二五六

(4) 造営費・維持費の氏子負担

二五六

2 通減禄の支給と境内地の縮小

二五六

(1) 通減禄取調牒

二五六

(2) 清水の三島神明社の場合

二五六

(3) 若一王子神社の場合

二五六

第三節 神社整理と祭祀の確立・社格

の昇進

二九五

一 神社の合併・合祀

二九五

1 神社整理令

二九五

2 一本木神社の成立

二九五

3 山下神社の誕生

二九五

<p>4 若一王子神社に合祀・移転の諸神社 二九 (1) 子安神社 二九 (2) 皇太神宮 二九 (3) 古峯神社 二九 (4) 八坂神社 二九</p> <p>5 飯綱宮跡の記念碑 三〇 6 宮本神明宮の古式の復興と県社昇格 三〇 7 古式作始めの神事の復興 三〇 8 神明宮の祭神と由緒 三〇 9 祭 神 三〇 (1) 古社の証明 三〇 (2) 摺れ動く祭神・祭祀 三〇 10 若一王子社の祭神・由緒の訂正 三〇 (1) 熊野を避けた祭神・由緒 三〇 (2) 第一次祭神訂正問題 三〇 11 最初の社格昇進願 三〇 (1) 社殿・境内の整備 三一 12 仁科盛遠と安部神社 三一 (1) 忠臣仁科盛遠 三一 (2) 村社安部社の由緒訂正 三一 13 若一王子神社と熊野勅請の復興 三一 </p>	<p>4 動ぎだした若一王子神社の社格昇進 三八 (1) 郷社若一王子神社 三八 (2) 本殿国宝指定と県社昇進 三九 (1) 本殿の国宝指定 三九 (2) 県社昇進 三九 5 二つの仁科神社 三〇 6 1 社の仁科神社創建願 三〇 7 平の仁科神社脱漏編入願 三〇 8 第四節 神道系諸教の動向 三〇 9 一 御 岳 教 三〇 10 1 御嶽教國立教会 三〇 11 2 御嶽教大町教会 三〇 12 3 木曾御嶽本教國八笠教会 三〇 13 1 大 本 教 三〇 14 大本教大町支部(代表田中実) 三〇 </p>
---	--

二 新憲法下の神社	一二三
1 宗教法人法	一二三
三 金光教(大町小教会)	一三四
1 国民精神作興と大麻颁布	一四五
2 大御神の御璽	一五六
二 神社に対する公費供進	一五六
1 神饌幣帛料供進	一五七
2 公費供進金	一五七
三 強化される戦勝祈願祭	一五六
1 事件・事変の度に	一五六
2 英靈帰還の度に	一五六
3 皇紀二六〇〇年	一五六
4 一億憤激・米英撃滅祈願祭	一五六
5 例祭行事の縮小	一五六
第六節 敗戦・新憲法下の神社	一三一
1 国家と神道の分離	一三一
2 神道指令	一三一
2 町内会隣組等による神道後援の禁止	一三一
第二章 市民と仏教・寺院	一三七
第一節 廃仏毀釈と松本藩	一三七
1 村々の寺院・仏堂と檀那寺	一三七
2 松本藩の強硬な廃寺政策	一三九
3 強硬な廃寺帰農の勧諭	一四一
第六節 敗戦・新憲法下の神社	一三一
1 大町組での説諭の状況	一四一
2 大澤寺住職快龍の主張	一四一
3 屈伏した天正院住職	一四一
4 靈松寺住職達淳の抵抗	一四三
第五節 戦時下の神社	一三四
1 国民精神作興	一三四
2 大御神の御璽	一三四
二 神社に対する公費供進	一三四
1 神饌幣帛料供進	一三七
2 公費供進金	一三七
三 強化される戦勝祈願祭	一三六
1 事件・事変の度に	一三六
2 英靈帰還の度に	一三六
3 皇紀二六〇〇年	一三六
4 一億憤激・米英撃滅祈願祭	一三六
5 例祭行事の縮小	一三六
第六節 敗戦・新憲法下の神社	一三一
1 国家と神道の分離	一三一
2 神道指令	一三一
2 町内会隣組等による神道後援の禁止	一三一

5	名主曾祢原正三等の苦惱	三四四
6	笞打たれる僧侶	三四五
四	存亡をかけた各宗派の努力	三四六
1	安達達淳の上京	三四七
2	淨珍寺の苦しみ	三四八
3	真言宗寺院の結束	三四九
五	追いつめられる松本藩	三五〇
1	遂に動きだした太政官	三五二
2	松本藩の対応	三五三
3	松本藩の消滅	三五四
六	廃寺の状況と処理	三五五
1	廃寺取調帳	三五六
2	廃寺の処分	三五七
第二節	寺院の復興と僧侶の活動	三五八
一	廃寺の再建	三五九
1	青龍寺移転と全久院の再建	三六〇
2	大龍山天正寺再建	三六一
3	延命閣の開設と彈誓寺再建	三六二
4	清水堂と清水寺再建	三六三
二	存続寺院の復興	三六四

第三節 寺院の昇格・創建と新興宗派の発展

一	曹洞宗寺院の昇格・創建	三五五
1	曹洞宗仏崎山觀音寺	三五五
2	曹洞宗南原山長性院	三五六
3	曹洞宗牛立山藥師寺	三五七
4	曹洞宗祥龍山泉嶽寺	三五八
二	日蓮宗および日蓮系宗派の発展	三五九
1	日蓮宗大光山妙心寺	三五九
(1)	日蓮宗の初期布教	三六〇
(2)	立正教会所の設立	三六一
(3)	大光山妙心寺の創設	三六二
2	日蓮正宗信濃山常樂寺	三六三
3	立正佼正会大町法座所	三六四

第三章 市民とキリスト教

第一節 解禁から開拓布教の時代	一 明治の切支丹禁制とその破綻	二 盛大な献堂式	三 教会幼稚園の創設	四 晩年の南部小三郎
2 宣教開始と大町への道	2 宣教開始と大町への道	3 苦難の開拓伝道	4 晩年の南部小三郎	5 無牧の中で教勢の高揚
3 最初に派遣された藤沼伝道師	3 苦難の開拓伝道	5 無牧の中で教勢の高揚	6 盛大な献堂式	7 盛大な献堂式
(1) 僧侶等による迫害	(2) 僧侶等による迫害	(3) 受難の伝道	(4) 晩年の南部小三郎	(5) 無牧の中で教勢の高揚
受難の伝道	受難の伝道	受難の伝道	受難の伝道	受難の伝道
第二節 講義所の開設から教会の創立	一 浸礼派講義所の開設	二 戰時下の受難	三 敗戦の日	四 戰後高揚期
1 異色の伝道師	1 浸礼派講義所の開設	2 戰時下の受難	3 敗戦の日	5 無牧の中で教勢の高揚
2 南部小三郎との出会い	2 南部小三郎との出会い	3 敗戦の日	4 戰後高揚期	6 盛大な献堂式
3 聖日休業の実行	3 聖日休業の実行	4 戰後高揚期	5 無牧の中で教勢の高揚	7 盛大な献堂式
二 講義所の充実と教会の創立	一 浸礼派講義所の開設	二 キリスト教の現況	三 敗戦の日	四 戰後高揚期
1 国家主義の高まりの中で	1 異色の伝道師	1 日本基督教団大町教会	2 大町単立めぐみ教会	5 無牧の中で教勢の高揚
2 大町浸礼教会の創設	2 南部小三郎との出会い	2 大町単立めぐみ教会	3 万国福音教団本部教会大町集会所	6 盛大な献堂式
第三章 教勢の高揚と教会堂の建設	3 聖日休業の実行	3 万国福音教団本部教会大町集会所	4 エホバの証人の大町王国会館	7 盛大な献堂式
第一節 天理教の誕生と初期布教時代	二 講義所の充実と教会の創立	4 エホバの証人の大町王国会館	5 無牧の中で教勢の高揚	6 盛大な献堂式
2 大町浸礼教会の創設	1 国家主義の高まりの中で	1 日本基督教団大町教会	2 大町単立めぐみ教会	3 万国福音教団本部教会大町集会所
第三節 教勢の高揚と教会堂の建設	2 大町浸礼教会の創設	2 大町単立めぐみ教会	3 万国福音教団本部教会大町集会所	4 エホバの証人の大町王国会館

第六節 戦後の天理教	二〇六
一 戰争による教勢の後退	二〇六
二 教義の復元	二〇七
第三節 市内各教会の現況	二〇七
1 信濃大町分教会	二〇七
2 北大分教会	二〇八
3 高瀬川分教会	二〇八
4 北安曇分教会	二〇九
5 岡島布教所	二〇九
第四節 編纂関係者	二一〇
あとがき	二一〇
執筆者一覧	二一〇
第五節 天理教公認、すすむ布教	二〇〇
一 天理教独立教派として公認	二〇〇
二 山名大教会系信濃大町宣教所の設立	二〇一
三 岐美大教会系北大宣教所の設立	二〇一
四 佐野原大教会系北安曇宣教所の設立	二〇四
第六節 戦時下の天理教	二〇四
一 「おふでさき」の回収	二〇四
二 全面的な戦時協力	二〇五
第二節 大町布教のはじまり	二五四
一 先駆者権田与七郎	二五四
二 大町布教所の開設	二五六
三 政府の天理教弾圧	二五六
第三節 受難時代の大町布教	二九七
一 大町講義所設立不許可	二九七
二 教勢の衰退	二九八
三 天理教会組織の近代化	三九九